筑摩世界文學大系

51

チェーホフ

木村彰一
神西　清　訳

筑摩書房

筑摩世界文學大系　51

昭和四十六年十一月五日　初版第一刷発行

チェーホフ

訳者　木村彰一
　　神西清

発行者　竹之内静雄

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号一〇一―九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷　多田印刷　製本　鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20651 (出版社) 4604

目次

たいくつな話　木村彰一訳　5
シベリヤの旅　神西清訳　45
決闘　神西清訳　65
妻　神西清訳　129
六号室　木村彰一訳　156
中二階のある家　木村彰一訳　193
すぐり　木村彰一訳　206
恋について　木村彰一訳　214
イオーヌィチ　神西清訳　221
往診中の一事件　木村彰一訳　235
可愛い女　神西清訳　243

犬を連れた奥さん　神西清訳　253
谷間　木村彰一訳　265
いいなずけ　木村彰一訳　293
かもめ　神西清訳　307
ヴーニャ伯父さん　神西清訳　343
三人姉妹　神西清訳　377
桜の園　神西清訳　421
手帖抄　神西清訳　128 234 252 264 342
チェーホフ論
——二重の調子になった物語性　R・ポッジョリ　富士川義之訳　457
解説　木村彰一　474
年譜　484

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

チェーホフ

たいくつな話

ある老人の手記から

一

ロシアに、ニコライ・ステパーノヴィチ某という、三等官で帯勲者の名誉教授がいる。彼が所持するロシアや外国の勲章の数はたいへんなもので、彼がそれをのこらず胸にかざって人前に出ると、学生たちが「聖隔」（祭壇の前にある、聖像を掛け並べた壁）が来たといって噂をする。彼の交友関係は、きわめて貴族的である。少なくともさいきん二十五年、ないし三十年の間に、ロシアの有名な学者で彼と親交のなかった者はひとりもいなかったし、現在もいない。今では親しく往来する者もなくなってしまったが、昔のことをいうとなると、たとえばピロゴーフ（一八一〇―八一、外科医）、カヴェーリン（一八一八―八五、歴史家、社会評論家）、詩人ネクラーソフ、といったような人物が、胸襟をひらいて彼とつきあったものだ。彼が親交を結んだ名士たちの長たらしい名簿は、こういう錚々たる名前がその最後をかざっているのである。彼はまたロシアの全大学と、三つの外国の大学の役員をしている。その他、いわく何、いわく何々。まだほかにもあげようと思えばいくらでもあげられるが、こういったいっさいのことがらが、実はかくいう私の名前なるものを形づくっているのである。

この私の名前は、よく通った名前である。ロシアでは、いやしくも文字を解する者なら誰でもそれを知っている。また外国では、この名前が大学の講壇で引合いに出されるたびに、かの有名なるとか、かの尊敬すべきとかいうような形容詞がつく。世の中には、公衆の面前や、印刷物の中で、罵倒したり、軽々しく口にしたり筆にのぼせたりするとこちらの品性が疑われることになるような名前があるものだが、私の名前もこの種の幸運な名前のひとつなのだ。それも不思議はない。なにしろ私の名前には、有名な、才能ゆたかな、そうして疑いもなく世を益する人物という観念が、しっかりと結びついているのだから。私はらくだのように勤勉で、忍耐強い。これは重要なことだ。それに才能もある。これはもっと重要なことだ。そればかりではない。ついでにいっておくが、私は教養のある、ひかえめな、しかもまちがったことのきらいな人間だ。文学や政治に首をつっこんだことは一度もない。無学なやからと論戦を交えて人気を博しようとしたこともない。宴会の席上で演説をしたり、同僚の葬式で弔辞を述べたりしたこともない……総じて私の学者としての名前には一点のくもりもなく、不平を言い立てる理由も何ひとつない。要するに幸運な名前なのである。

さて、この名前の持ち主、つまり私は、頭のはげた、総入歯の、不治の tic（顔面神経痛）になやむ、当年六十二歳の老人である。私の名声がうつくしく、かつかがやかしいのに反比例して、私自身はみにくく、かつみすぼらしい。頭と両手は衰弱のためにふるえ、首はツルゲーネフの或る作品の女主人公のようにコントラバスの柄そっくり、胸はおちくぼみ、肩幅はせまい。話をしたり、講義をしたりすると、口が一方にへしまがり、微笑すると、顔全体が老人特有の干からびたようなしわにおおわれる。私のみじめな姿には、人の印象に残るようなところは何ひとつない。もっとも、tic の発作がおこっているときだけは別だ。そういうときには、私の顔に或る種の特別な表情がうかぶ。そうしてそれを見た者はだれでもはっと胸をつかれて、『どうやら、この男も先がながくないな』という、きびしい感慨におそわれるにちがいない。

今までもそうだったが、私は講義はわりあい上手なほうだ。今でも私は二時間にわたって聴講者の注意をそらさずに講義をすることができる。私の声はまるみやうるおいにとぼしく、そのうえ偽善者によくあるような猫なで声なのだが、熱のある態度、文学的な叙述、それにユーモアが、私の声のそういう欠点をほとんど完全におおいかくしてくれるのである。そのかわりものを書くほうはだめになった。私の脳髄の、ものを書く能力をつかさどる部分が、はたらきをやめてしまったのだ。私の記憶力は減退し、

思考は統一を欠いている。思想を紙に書きつけるたびに、私がいつも感ずるのは、思想の有機的な連関にたいする感覚がなくなってしまって、文章の構造は変化に乏しく、フレーズは貧弱で暢達さがない、ということである。私はしばしば書くつもりでもないことを書いてしまう。おわりの部分を書くときははじめの部分をおぼえていない。しばしばごくありふれた言いまわしが思い出せず、かと思えばまたよけいな文句や、不必要な挿入句を書かずにおこうとして、常に多大のエネルギーをついやさなくてはならない――どちらも知的な活動力の衰退を示していることは明瞭である。しかもおどろくべきことには、書くものが簡単であればあるほど、私の緊張は苦しさを増すのである。私は学術論文を書くときには、お祝いの手紙や報告書を書くときにくらべて、はるかに気が楽で、しかも自分がかしこくなったような気がする。ついでにもうひとつつけ加えておくが、私はロシア語で書くよりドイツ語か英語で書くほうが楽である。

現在の私の生活について語るとなれば、私はまず第一にさいきん私がかかっている不眠症のことを言わなくてはならない。私は、現在私の存在の主要、かつ基本的な特徴をなすものは何か、とひとにきかれたら、即座に《不眠症》と答えるだろう。昔からの習慣で、私はきっかり十二時に服をぬいで寝床にはいることにしている。ところが、寝つきは早いかわり、一時すぎになると眠がさめてしまい、しかもぜんぜん寝たような感じがしない。そこでやむをえず起きあがってランプをつける。一時間か二時間のあいだ、私は部屋の中を行きつもどりつしながら、昔から見なれた絵や写真をじっと眺める。歩くのにあきてくると、テーブルの前に腰をおろす。そしてじっとすわったきりで、何ひとつ考えず、何ひとつしたいとも思わない。目の前に何か本でもあると、機械的にそれをひきよせて、ぜんぜん興味を感じずに、それを読む。たとえばついこの間も、『つばめは何をうたったか』という奇妙な題のついた小説を、ひとばんで機械的に読んでしまったことがある。あるいはまた、注意力を集中するために、むりやりに千までかぞえようとしてみたり、だれか同僚の顔を思いうかべて、その男が就任したのは西暦何年で、そのときの事情はどんなだったかを、思い出そうとしてみたりする。そんなとき、私はいろいろな物音にききいるのが好きだ。ふた間はなれた向こうの部屋で、娘のリーザが何か早口で寝ごとを言うこともある。妻がろうそくを持って広間を通ることもある。そのとき妻はいつもきまってマッチ箱をおとす。それから干われてきた戸棚のきしる音。ランプのしんがだしぬけに立てるじゅうじゅうという音。――そしてどういうわけかこういう物音がみんな、私を興奮させるのである。

夜眠らずにいることは、自分がノーマルな人間でないことをたえず意識しているようなものだ。だから私は、眠らずにいる権利を生ずる朝と昼とを、今か今かと待ちこがれるのである。長い苦痛の時間がすぎた後、やっとそとで鶏がなきはじめる。鶏の声は私にとっては最初のよろこばしいしらせだ。その声をきくや否や、私はもう一時間たったら下にいる門番が眼をさまし、おこったような咳をしながら、何かを取りに階段をあがって来るだろう、ということがわかるのである。それから窓のそとがしだいに白みはじめ、やがて往来から人声がきこえてくる……

私の一日は妻の出現とともにはじまる。彼女はスカートをはいただけで、髪にくしも入れず、私の部屋にはいってくる。もっとも顔はもう洗っていて、花の匂いのするオーデコロンをつけている。そうして、何気なしにはいって来たような様子で、いつもきまって同じことを言うのである。

「あら。ごめんなさい。私ただちょっと……また徹夜なさいましたの？」

それからランプを消し、テーブルのそばに腰をおろして、話をはじめる。私は予言者ではないけれども、どんな話になるかは、前もってわかる。毎朝きまって同じなのだ。たいていは私の健康についていろいろと心配そうにたずねたあと、彼女は突然、ワルシャワで将校勤務をしている私たちの息子のことを思い出す。毎月二十日すぎに、私たちは五十ルーブリずつ彼に送金しているが、これが私たちの会話の主要なテーマになるのである。

「それはもう私たちは苦しいにちがいありませんけれど」と彼女はため息をつく、「でもあの子が本当にひとりだちになるまでは、めんどうを見てやるのが私たちの義務ですわ。よその国で暮して、お給金だって少ないんですし……でもなんでしたら来月分は五十ルーブリでなしに、四十ルーブリにしておきましょうか。あなたはどうお思いになりますの？」

支出というものは、何もしょっちゅうその話をしたからといって別に少なくなるわけのものではない。こんなことは毎日の経験で、妻にもわかっているはずだ。だが私の妻は経験を認めようとしない。そして、うちの将校のこととか、おかげでパンは値段がさがったが砂糖は二コペイカあがったとか、そういうことを、きまって毎朝話題にするのである――しかも私に何かおもしろいニュースでも伝えるような調子で。

私は機械的にあいづちを打ちながら、じっときいている。そのうち、たぶん夜寝なかったせいだと思うが、奇怪な、何の役にも立たない想念が私をとらえる。私は自分の妻を眺めて子供のようにおどろくのである。思いまどうような気持で私は自問する。このひどくふとった不恰好な老婆、パンひときれのためのくだらない気苦労や恐怖を物語るにぶい表情をうかべたこの女、たえず借金や生活苦のことを考えているうちに眼のかがやきを失ってしまったこの女、物いりの話しかできず、値さがりのときにしか微笑できないこの女――はたしてこの女が、かつてはあのすらりとやせたヴァーリャそのひとだったのだろうか。かつて私が、その高い、明晰な知性と、きよらかな魂と、うつくしさと、またオセロがデズデモーナを愛したときのように、私の学問にたいする《同情》とのゆえに、情熱をこめて愛するようになった、あのヴァーリャだったのだろうか。はたしてこの女が、かつて私の息子を生んでくれた、私の妻ヴァーリャと同じ人間なのだろうか。

私はこのぶよぶよにふとった不恰好な老婆の顔をひたと見つめて、その中になつかしいヴァーリャのおもかげをさがし求める。だが彼女の中に、今も変らずそのまま残っているのは、私の健康にたいする気づかいのほかには、私の俸給を私たちの俸給とよび、私の帽子を私たちの帽子とよぶ習慣だけなのだ。私は彼女を見るのがせつなくてならない。だから、せめて少しなりとも彼女をよろこばすために、私はどんなおしゃべりでもだまってきき、彼女が他人にたいしてまちがった判断をくだしたり、あるいは開業もせず、教科書も出さないといって私をせめるときですら、何ひとつ言わないのである。

われわれの会話はいつも同じようなふうに終る。妻はとつぜん私がまだお茶を飲んでいないことを思い出してあわてだす。

「まあ、私ったら、こんなところにすわりこんでしまって」と彼女は立ちあがりながら言う。「サモワールはとっくにテーブルに出ているというのに、ここでおしゃべりをはじめるなんて、私ももうろくしたもんだ」

こう言って、彼女はそそくさと部屋を出ようとするが、ふとドアのところで立ちどまる。次のことを言うためである。

「私たち、エゴールに五カ月分借りになっていますわ。ごぞんじですの？　使用人の月給をためてはいけないって、あれほど申しあげたじゃありませんか。五カ月ごとに五十ルーブリ出すよりはひと月に十ルーブリ出すほうが、ずっと楽ですよ」

廊下へ出てから、もう一度立ちどまって、今度はこう言う。

「ほんとうに、うちのリーザくらいかわいそうな娘はありませんわ。音楽学校へかよって、お友だちはみんな上流のかたばかりだというのに、あんなひどいものを着ているなんて。毛皮外套なんか、そとへ着て出るのも気がひけるようなしろものですよ。あの娘がだれかよそのうちの娘なら、あれでもいいでしょうけれど、なにしろお父さまは名高い大学教授で三等官だってことは皆さんごぞんじなんですからねえ」

私の名声や官等を引合いに出して私をたしなめたのち、彼女はとうとう行ってしまう。こうして私の一日がはじまるのだ。その続きもべつに代りばえはしない。

私がお茶を飲んでいると、リーザが部屋へはいってくる。毛皮外套を着、帽子をかぶり、楽譜を手に持って、もう音楽学校へ出かけるばかりの身なりをしている。彼女は二十二だ。しか

し年よりは若く見える。なかなか美人で、それにいくらか私の妻の若い時分に似ている。彼女は私のこめかみと手にやさしく接吻してから、こう言う。

「パパ、おはようございます。ご気分はいかが？」

子供のころ、彼女はアイスクリームが好きだったので、私はよく彼女を喫茶店へつれて行ったものだ。彼女にとって、アイスクリームはこの世のあらゆるすばらしいものをはかる尺度だった。私をほめたいと思うとき、彼女はこう言った。「パパはクリームみたい」彼女の指にはフスダシュウの指、クリームの指、エゾイチゴの指、というふうにひとつひとつ名前がついていた。彼女が朝のあいさつをしに私のところへ来ると、私はたいてい彼女をひざの上に抱きあげて、指にひとつひとつ接吻しながら、こう言ったものだ。

「これはクリームの指……これはフスダシュウの指……これはレモンの指……」

今も古い記憶をよびおこしながら、私はリーザの指に接吻して、「フスダシュウの指……クリームの指……レモンの指……」とつぶやく。だがその調子はいかにもそらぞらしい。私の心がアイスクリームのようにつめたくなってしまったからだ。私はそれがはずかしい。娘が私のところへはいって来て、私のこめかみに唇をふれるたびに、私はまるで蜂にでもさされたようにびくっとする。そして無理に微笑しながら、顔をそむけてしまう。不眠症がはじまってからというもの、私の頭には次のような疑問がくぎのようにつきささっている。いったい、私の娘は、老人であり、知名の士であるこの私が、給仕人に借りがあるために、ばつのわるそうに顔をあからめるのをたびたび見ているはずだ。とるに足らぬ借金を気にやむあまり、しょっちゅう仕事を放擲しては、何時間も部屋の中を行ったり来たりしながら考えこんでいるところを見ているはずだ。それなのに、なぜ一度も母にないしょで私のところへ来て、こうささやいてくれないのだろう、『お父さま、わたしの時計や腕輪やイヤリングやドレスを持って来ましたわ……これをみんな質にお入れになって。だってお父さまはお金がお入り用なんでしょう？』私と母親とが、虚栄心に負けて、自分たちの貧乏を他人に気どられまいと骨おっているのを見ていながら、なぜ彼女は音楽の勉強というめっぽう金のかかるたのしみをあきらめようとしないのだろう。もちろん私は時計や腕輪を受け取る気はない。どんなぎせいだって断じてはらわせはしないつもりだ、――私がほしいのはそんなものではないのだ。

ここで思い出したから、ついでにワルシャワで将校をしている息子のことも言っておこう。あれは頭のいい、正直な、しっかりしたやつだ。だが私はそれだけではものたりない。たとえば私に年をとった父親があるとして、その父親がときどき金がないためにはずかしい思いをするのをもし私が知っているとしたら、私は将校の地位をだれかほかの者にゆずり、自分はどこかで口を見つけて働くだろうと思う。だが子供たちについてこんなことを考えるのはたえがたいことだ。そんなことを考えてどうなるというのだ。世間なみのひとたちが英雄でないからといって、そのひとたちにたいしてひそかにうらみを抱くのは、了簡のせまい人間か、世をすねた人間だけがあえてなしうることだ。もうこんな話はやめにしよう。

十時十五分前。私はわが愛すべき小僧たちのいるところへ行って、講義をしてやらなければならない。そこで身支度をして通りをてくてく歩いて行く。もう三十年もかよいなれた道で、私にはいろいろな思い出がある。薬局のあるあの大きな灰色の建物。以前はもっと小さな建物で、中にビヤホールがあった。そのビヤホールで私は学位論文の構想をねったものだ。ヴァーリャにあてて最初の恋文を書いたのもあそこだ。あたまに《Historia morbi》(歴病)と印刷してある紙に、鉛筆でそれを書いた。それからあの食料品店。あそこには昔ユダヤ人のおやじがいて、タバコをつけで売ってくれたものだ。そのあとでふとったおかみが来た。《学生さんにはめいめいお母さんがある》という理由で、学生たちをかわいがってくれた。いま帳場にすわっているのは、銅の急須からじかにお茶を飲むような、ひどくぶっきらぼうな赤毛の商人だ。やがて黒ずんだ、長いこと修繕してない大学の門が見え

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

てくる。それから羊の皮衣を着こんだ、所在なさそうな掃除夫、箒、雪のふきだまり……田舎から出て来たばかりで、科学の殿堂は文字どおり殿堂だと思いこんでいるうぶな少年に、このような門は有害な印象を与えるにちがいない。一般的に言って、この大学の古色蒼然たる建物、まっくらな廊下、煤けた壁、乏しい光線、それに陰気くさいベンチや階段や携帯品置場などは、もしロシアの厭世主義の歴史を書くとすれば、そういう思想傾向をそだてた有力な素因のひとつとして、特筆大書する価値があろう。……それから校庭。見たところ私が学生だった時分からよくもわるくもなっていない。私はこの校庭がきらいだ。貧相な菩提樹や、黄色っぽいアカシアや、たまにしか見当らないみじかく刈りこんだライラックなどのかわりに、亭々たる松の大木や立派なかしの木でも植えてあるほうがよほど気がきいている。学生はたいていの場合環境によって気分を左右されるものだ。だから学生が勉強する場所では、どちらを向いても高いもの、力強いもの、優美なもののほかは眼にはいらないようになっていなくてはならない。……やせほそった木々や、ガラスのこわれた窓や、灰色の壁や、ぼろぼろの油布を張った扉などは、どんなことがあっても学生たちの眼にふれさせたくないものだ。

研究室のある建物の昇り口まで来ると、扉がさっとあいて、私の昔からの同僚で、おない年で、名前も同じ門衛のニコライが私を迎えてくれる。私を中へ入れてしまうと、彼は咳ばらいをひとつして、こう言う。

「閣下、えらく冷えますようで」

あるいはまた、もしも私の外套かぬれている場合は、

「閣下、雨でございますな」

それから小走りに私の前を進みながら、行く手のドアをひとつひとつあけてくれる。研究室へつくと、ていねいに外套をぬがせてくれ、そのあいだに学内のニュースを何かと話してくれる。大学の門衛や守衛は、みな互にじっこんのあいだがらだから、そのおかげで彼も四つの学部や、本部や、総長室や、図書館で起ったできごとはなんでも知っているのである。実際、彼の知らないことは何ひとつないといっていい。たとえば総長とか学部長の辞任問題が起きると、さっそく彼が若い守衛たちを相手に後任候補者の名前をあげてその噂をしているのが私の耳にはいってくる。しかも彼は、だれそれは大臣が許可しないだろうとか、だれそれは自分のほうから辞退するだろうとか、そういうことがらをいちいち説明したあげく、さらに、本部へ怪文書が舞いこんだとか、大臣と理事とが密談を交わしたとか、そういった種類の、ちょっと信じられないようなこまかい話までする。こういう細部の点をのぞけば、彼の言うことは、概してほとんどはずれたためしがない。ひとりひとりの候補者にかんする彼の人物批評も、奇抜ではあるが、やはり肯綮にあたっている。西暦何年にだれが学位論文の審査を受けたか、教職についたか、退官したか、あるいは死んだか、というようなことを知りたかったら、この兵隊あがりの男の途方もない記憶のたすけをかりるがいい。彼は単に年月日をあげるだけでなく、そのときの事情がどんなだったかを、こともこまかに説明してくれるだろう。ひとり愛ある者のみが、こんなふうに記憶しているものである。

ニコライはこの大学の伝承の保持者である。前任者である同じ門衛たちから、彼は大学という世界が生んだ数々の伝説を遺産として受けつぎ、さらに自分の奉職中に獲得した財産の中から多くのものをこれに加えて、富をふやした。もしおのぞみとあれば、彼は長短さまざまの物語をいくつも話してきかせるだろう。彼は《なんでも》知っていた世にも珍しい賢者の話だとか、幾週間も寝なかったおどろくべき勉強家の話だとか、学問に身をささげた数多くの殉教者や犠牲者の話だとか、そういった話をすることができる。彼の話の中では、善は常に悪にたいして勝利を占め、弱者は常に強者に打ち勝つ。また知恵ある者は愚かな者に、謙遜な者は心おごれる者に、若者は年老いた者に打ち勝つのである……こうした伝説や作り話をいちいち額面どおり受けとる必要は少しもない。しかしそれらを濾過器にかけてみれば、われわれの必要とするものがそこに残るだろう。それはすなわちわが大学のすぐれた伝統であり、万人のみとめる真の英雄たちの名である。

われわれの社会では、学者の世界についてひとが知っているのは、せいぜい老教授の異常な放心ぶりについての笑い話とか、グルーベル（一八一四―九〇、解剖学者）や、私や、バブーヒン（一八三五―九一、生理学者）に帰せられる二、三の警句ぐらいのものである。教養ある社会として、これではいかにものの足りないではないか。もしわれわれの社会が、あのニコライが愛するように学問なり学者なり学生なりを愛しているとしたら、わが国の文学は、とうの昔からある種の叙事詩や、物語や、聖者伝をいくつも持つことになったであろう。残念ながら、今のところ、この種の作品はひとつも見当らないのである。

私にひととおりニュースを伝えてしまうと、ニコライは急に厳粛な顔つきになる。それからわれわれは事務的な会話をはじめる。もしもその場にだれか局外者がいあわせて、ニコライが専門の術語をいとも楽々とあやつるのをきいたら、そのひとはニコライのことを兵隊あがりに姿をやつしたひとかどの学者だと思うかもしれない。ついでながら、大学の守衛は学があるという風説には、はなはだしい誇張がある。なるほどニコライはラテン語の術語を百以上も知っているし、骸骨を組み立てたり、ときにはプレパラートを準備したりすることもできるし、また学者でなければ知らないような引用句をながながと引いて、学生たちを笑わすという芸当も心得ている。しかし彼にとっては、たとえば血液の循環にかんする簡単な理論ですら、二十年前と同じく、いまなおまったく不可解なのである。

研究室の机の前には、私の解剖学助手のピョートル・イグナーチエヴィチがすわって、本かプレパラートの上にひくく身をかがめている。勤勉で、つつしみぶかくはあるが才能のない男だ。年は三十五、六だが、もう頭がはげて、腹がつき出ている。彼は朝から晩まで仕事をする。何でもよく読む。しかも読んだことは実によくおぼえている。こういう点から見ると、彼はすばらしい男だ。だがそのほかの点では、――彼は馬車馬である。あるいは、別の言葉でいえば、学問のあるとんまである。馬車馬と天分のある人間とを区別する特徴は次のとおりである。すなわち、馬車馬は視界がせまく、しかもはっきり専門のことだけに限られている。専門外のことになると、馬車馬は子供のようにたわいがない。今でもおぼえているが、ある朝、私は研究室へはいるなりこう言った。

「たいへんなことになったよ。スコーベレフ（一八四三―八二、露土戦争当時勇名をはせた将軍）が死んだそうだ」

ニコライは十字を切ったが、ピョートル・イグナーチエヴィチのほうはこちらをふりむいて、こうたずねたものだ。

「スコーベレフって、どういうひとですか？」

またあるとき――これは今の一件より少し前のことだが――私がペローフ教授（一八三三―一八二、画家）の死んだことを告げると、ピョートル・イグナーチエヴィチは私にこうたずねた。

「何の講義をしていたひとですか？」

こういうぐあいだから、たとえ耳のすぐそばでバッティ（一八四三―一九一九、イタリア生れの名ソプラノ歌手）が歌い出そうと、シナ人の大軍がロシアへ攻めよせてこようと、地震が起ろうと、彼は眉ひとつ動かさず、あいかわらず眼を細くしながら、泰然自若として顕微鏡をのぞいていることだろう。要するに、専門外のことは、どこ吹く風なのである。私はどんな高い金をはらってもいいから、この石頭が細君といっしょに寝ているところを見たいものだと思う。

この男のもうひとつの特徴は、科学、および主としてドイツ人の手になるすべての著作の無謬性にたいするとほうもない信仰である。彼は自分自身や自分のプレパラートについては絶大な自信がある。人生の目的も知っている。しかし才能ある者の頭髪を白くする懐疑や幻滅にはまったく縁がない。権威に盲従して、自主的にものを考えようとする意欲を欠いている。何ごとについても、彼の信念をひるがえさせることは至難のわざであり、彼と議論をたたかわすことは不可能である。最もすぐれた科学は医学であり、最もすぐれた人間は医者であり、最もすぐれた伝統は医学の伝統であると堅く信じている者と、どうして議論ができよう。いったい医学のかんばしくない過去の伝統のうちで、今もそのまま残っているのは、現在医者たちがつけている白ネクタイぐらいのものである。あえて学者といわず、一般に教養ある人々が承認しう

る唯一の伝統は、医学とか法律学とか、そういう分類とは全然かかわりのない、大学全体の伝統なのだ。だがピョートル・イグナーチエヴィチにこの道理を納得させることはむずかしい。それに彼は最後の審判の日まであなたと論争をつづけることも辞さないだろう。

私の眼前には彼の将来がまざまざと浮んでくる。一生の間に、彼は何百かの非のうちどころのないプレパラートを作り、体裁だけは完璧な、無味乾燥な報告をいくつも書き、良心的な翻訳を十ばかり仕上げるだろう。しかし世間をおどろかすような仕事は何ひとつできないだろう。そういう仕事をするには想像力や独創力や推理力が必要だ。ところがピョートル・イグナーチエヴィチはそういう能力をなにひとつ持ち合わせていないのだ。要するに、科学の世界では彼は主人ではなくて、雇い人なのである。

私と、ピョートル・イグナーチエヴィチとニコライは小声で話す。三人とも少しあがり気味である。扉の向こうの講義室から伝わってくる海鳴りのような音をきくのは、一種異様な感じがするものだ。三十年の間、私はこの感じに慣れきることができず、今でも毎朝あらためてそれを経験するのである。私は神経的にフロックコートのボタンをかけ、ニコライによけいな質問をし、そしてむかっ腹を立てる。……うわべは気おくれしているのと同じに見えるが、実は気おくれとは別物である。何と名づけたらいいか、ちょっと形容もできないような感情である。

私はなんの必要もないのに時計を眺め、それからこう言う。

「さあ、もう出かけなくちゃ」

われわれはしずしずと進んで行く。プレパラートと解剖図を持ったニコライがいちばん先を進み、そのあとが私、そのあとがうやうやしく首をたれた例の馬車馬、という順序である。あるいはまた、もし必要とあれば、担架にのせた屍体が前を進み、屍体のあとがニコライ、という順序のこともある。私が姿を見せると学生たちはいっせいに起立し、それから着席する。海鳴りの音はしずまって、凪ぎがおとずれる。

私は、講義の内容については知っているが、どんなふうに講義するか、また何からはじめて何でおわるか、ということは考えていない。私の頭の中にはまとまった文章はひとつもはいっていない。しかし講義室（私の講義室は階段教室になっている）をひとわたり見まわしてから、「前回の講義のおわりで、われわれは……」という例のきまり文句を言いさえすれば、そのあとは言葉が長い列をなして次から次へと頭の中からとび出してくる。さて、それからが見ものだ。私はものすごい早口で、情熱的にまくしたてる。こうなったら、どんな力をもってしても私の言葉の奔流をせきとめることは不可能だ。いい講義、つまり聴講者があきないでなんらかの利益を得られるような講義をするためには、才能のほかに経験や熟練した腕前をもっていなくてはならない。また自分の力倆や、講義の相手や、講義の対象について、少しもくもりのない、はっきりした観念をもっていなくてはならない。さらにまた、自分の視界を一時たりとも見失わず、たえず鋭く見はっていられるような気転のきく人間でなくてはならない。

いったい、すぐれた指揮者というものは、作曲者の思想を再現するにあたって、二十ぐらいの仕事を一度にはたすものである。彼はスコアを読んだり、指揮棒をふったり、歌手を注視したり、あるときはドラムのほうへまたあるときはフレンチ・ホルンのほうへ合図をおくったり、その他いろいろなことをする。私が講義をするときもこれと同じだ。私の前には、ひとつひとつちがう百五十の顔と、まっすぐに私の顔をみつめる三百の眼がある。私の目的は、この多頭の怪蛇を征服することだ。講義をしているあいだ、この怪物の注意力や理解力の程度についてのはっきりした観念を一瞬間も見失わずにいられれば、この怪物は私の手中にあるわけだ。私には、さらにもうひとつの敵があって、こちらのほうは私自身の中にひそんでいる。それは形式や現象や法則の無限の多様性、およびそれらに支配される自分や他人の思想の豊富さである。この厖大な材料の中からいちばん大事な、なくてはならぬものだけをつかみ出し、自分の言葉の流れに劣らぬ速度で、相手の怪物の理解できるような、またその注意を喚起しうるような形式をそれに付与するという芸当を、私は一分ごとにやらねばならない。しかもそのさい、思想

が積み重ねられて行く順序ではなく、自分の描こうと思う画面の正しい構成に必要な一定の順序で思想を伝えうるように、ぬかりなく心をくばっていなくてはならない。さらにまた私は、表現を文学的にし、定義を簡潔、正確にし、文章をできるかぎり単純でうつくしいものにしようと心がける。一分ごとに私は自分をおしとどめ、自分の持ち時間は一時間四十分しかない、ということを思い出さねばならない。要するに、することは実に多いのである。学者、教育者、雄弁家の三つの役を同時に演ずるようなものである。しかも自分の中の雄弁家が教育者や学者を圧倒したり、その逆になったりすれば、ことは失敗におわるほかないのである。

十五分、三十分と講義をつづけるうち、ふと気がつくと、学生たちがしきりに天井を眺めたり、ピョートル・イグナーチエヴィチのほうを見たりしている。ハンカチにかくれてあくびをする者もあれば、姿勢を楽にするためにすわりなおす者もある、中には何か思い出してひとり笑いをする者もあるというぐあいだ……これはつまり、あきがきて、注意力が散漫になった証拠だ。対策を講じないと困ったことになる。そこで私は最初の機会をとらえて、しゃれをひとつとばす。とたんに百五十の顔が全部手放しの笑い顔になり、眼がたのしげにかがやき、ほんの少しのあいだ例の海鳴りの音がきこえる……私も笑う。注意力は回復し、私は先をつづけることができる。

講義をしながら、私はどんな論争、どんな娯楽やゲームも及ばぬ愉悦を味わったものだ。講義をしているあいだだけ、私はあらんかぎりの情熱を傾倒することができた。そうして霊感というものが詩人の思いつきではなく、実際に存在するものであることを理解した。私は、最も快心の難事業をなしとげたのちのヘラクレス（ギリシア神話の英雄）といえども、私が講義をおえるたびに感じたようなこころよい疲労感は味わったことがないだろうと思う。

もっとも、これはだいぶ前のことである。今は、講義をすれば苦痛を感ずるだけだ。三十分とたたないうちに、足や肩ががまんのならないほどけだるくなってくる。椅子に腰をおろしてみるが、かけたまま講義をすることには慣れていないので、すぐに椅子からからだをおこし、立って講義をする。かと思うとやがてまた腰をおろす。口のなかがからからにかわき、声は嗄れ、頭はくらくらしてくる……こうした状態を聴講者に気づかれまいとして、私はひっきりなしに水を飲む。のべつ鼻をかんで、鼻かぜでからだのぐあいがわるいようなふりをする。見当ちがいなしゃれを連発する。そしてあげくのはてには、休憩時間が来る前に講義を打ち切ってしまう。だが何よりも大事なことは、私が恥じているということだ。

私の良心や分別は、今私のなしうる最善の行為は、小僧たちにむかってお別れの講義をしてやり、彼らに最後の言葉を述べ、彼らを祝福し、そして私より若くて体力もある者に地位をゆずることだ、と私に告げている。けれども、たとえそのために神のさばきを受けようと、私は良心に従って行動するだけの勇気がないのである。

不幸にして、私は哲学者でも神学者でもない。私は、自分の命があと半年とはもたないだろうことをよく承知している。だから現在私が最も関心をよせているのは、私を待ちうけている暗黒の世界や、死者の眠りを訪れるまぼろしの問題であるはずだと、ひとはだれしも思うだろう。だが、理性がその重要性を完全に認めているにもかかわらず、私の心はなぜかこういう問題をてんから受けつけないのである。二、三十年前と同様、死に直面している現在でも、私の関心をひくものは科学だけである。人生において最も重要な、最もすばらしい、そして最も必要なものは科学であるという信念、科学こそ常に愛の最高の発露であったし、将来もそうであろうという信念、そして人間は科学によらずしては、自然や自己に打ちかつことができないという信念を、私は臨終のときにも依然として持ちつづけるだろうと思う。この信念は素朴すぎて、しかも根本的にまちがっているかもしれない。しかし私の信念がまさにこのようなものであるということは、私の罪ではない。それに心の中でこの信念に打ちかつことは、私にはできないのである。

しかし、私の言いたいのは、むしろ次のことである。つまり私は、私の弱さを大目にみても

らいたいと考えているにすぎないのである。宇宙の究極の目的という概念などよりは、むしろ骨髄の運命に興味をもつような人間を、講壇や学生たちから引きはなすのは、その人間がまだ死なないうちに、やにわに棺おけの中へぶちこむのと同じことだということを理解してほしいのである。

不眠症のおかげで、またますますつのって行く衰弱との苦しいたたかいのせいで、私の心身には不思議な現象が起りつつある。ほかでもない、講義のさいちゅうに、私は突然涙でのどがつまり、目がしらがあつくなってくる。そしてそれと同時に私は、両手を前へさしのべ、声を大にして聴衆に訴えたいという、はげしいヒステリカルな衝動をおぼえる。私、知名の士であるこの私は、運命から死刑を宣告されている、半年もしたら、もうだれかほかの者がこの講堂を主宰しているだろう、そんなことを私は大きな声で叫びたくなってくる。私は心のやすらぎを失ってしまった、以前には知らなかった新しい考えが私の晩年を毒し、蚊のように私の脳髄を刺しつづけている、私はそう叫びたいのである。こうしたさいの私の状態は、われながらぞっとするほど恐ろしいものに感じられる。だから私は聴講者一同がおぞけをふるって座席からとびあがり、必死の叫びをあげながら、あわてふためいて出口へ殺到してくれればいいとさえ思うのである。

このような瞬間を経験することはなまやさしいことではない。

二

講義がおわったあと、私は家にいて仕事をする。雑誌を読んだり、ひとの学位論文に眼を通したり、次の講義の準備をしたり、場合によっては何か書きものをしたりする。仕事はときどき中断される。来訪者に会わなくてはならないからである。

表のベルが鳴る。同僚のひとりが事務的な打合わせをしに来たのだ。彼は帽子とステッキを手に持ってはいってくる。そしてそれを両方とも私のほうへ出して見せながら、こう言う。

「ちょっと、ほんのちょっとおじゃまするだけです。どうかお立ちにならないで、collegaすぐおいとまするんですから！」

こういう場合、われわれはまず第一に、自分がいかにいんぎんをきわめているか、相手の顔を見るのがいかにうれしいかということを、互に示し合おうとつとめる。私は彼を肘掛椅子にすわらせ、彼は私をすわらせる。そのさい、われわれは互に相手の腰を用心深くなでまわし、互に相手のボタンに手をふれる。まるで互に探りあいをしながら、火傷をしはしまいかと心配しているような恰好である。何もおかしいことを話すわけでもないのに、二人ともしきりに笑う。椅子に腰をおちつけてしまうと、今度は互に顔をよせあって、小声で話をはじめる。われわれはたとえ互にどれほど好意を感じていても、たとえば「ただいまのお言葉はまことにごもっともで」とか、「すでにお耳に入れましたように」とか、そういうシナ風の美辞麗句のかぎりをつくして、言葉を飾らないわけにはいかない。相手のしゃれがまずくても、呵々大笑しないわけにはいかない。打合わせがすんでしまうと、同僚ははじかれたように立ちあがって、私の仕事机のほうへ帽子をふり、わかれのあいさつをやりだす。そこでまたわれわれは、互に相手のからだにふれあい、笑いをかわす。私は客を玄関まで送って行って、毛皮外套を着せてやろうとするが、相手はあらんかぎりの努力をしてこの至上の光栄を辞退しようとする。いよいよエゴールが表の扉をあけるだんになると、私は、かぜをおひきになってはいけませんからと客が固辞するのもかまわず、往来までも送って行きかねないそぶりを見せる。それからやっと書斎へ戻って来るが、そのときになっても私の顔からは依然として微笑が消えない。たぶん惰性というものなのであろう。

しばらくすると、またベルが鳴る。だれかが玄関へはいって来て、のろのろと外套をぬぎ、咳をしているのがきこえてくる。そのうちエゴールが、学生さんですと取り次ぐ。私は通せと言う。やがて感じのよさそうなひとりの青年がはいってくる。この男と私とのあいだには、もう一年もまえから緊迫した関係がつづいている。試験のときにひどくかんにさわる答え方をするので、私はいつも彼に不可をつけてきたのであ

る。こういういさましい連中、学生用語で言えば、私に《にらまれ》たり、《落され》たりする連中は、毎年七人やそこいらは出る。力が足りなくて、あるいは病気のせいで試験に合格できない連中は、しんぼうづよく苦難にたえて、嘆願しにこない。嘆願しに私の家までおしかけてくるのは多血質の連中、つまり試験がいつまでも受からないと食欲が減退して、まめにオペラへかよう気がしなくなる豪傑肌の連中である。私は第一の種類の学生たちは大目に見てやるが、第二の種類の連中は一年じゅう《にらんで》やることにしている。

「かけたまえ」と私は客にむかって言う。「何か用かね？」

「先生、おじゃましてすみません……」と相手は、私の顔を見ないようにしながら、どもりどもり話し出す。「おじゃましては悪いと思ったんですけど、どうしてもその……先生の試験、もう五へんも受けたんですが……五へんとも落ちてしまいました。すみませんけど特別のお慈悲で可をつけていただけないでしょうか。と申しますのは……」

怠け者の学生たちが、自分の立場を有利にするために用いる論法は、いつも判で押したように同じである。ほかの課目には全部立派に合格したのに、私の課目にだけは落ちた、あの課目はふだんから一生懸命勉強して、すみからすみまで知っているくらいだから、落ちたことは実に意外だった、自分にはよくわからないが、なにか誤解があったのではあるまいか、云々、というわけである。

「君には気の毒だと思うが」と私は客にむかって言う、「可をあげるわけにはいかないよ。家へ帰ってノートをもう一べん読んでから出直して来たまえ。そのうえで考慮してあげよう」

沈黙。私は、学問よりはビールやオペラのほうが好きなこの学生を少しいじめてやれという気が起きる。そこでため息をついて、こう言う。「私はこう思うんだが、つまり今の君にできるいちばんいいことは、医学部をきれいさっぱりとやめてしまうことだね。だって、君ぐらい能力があるのに、どうしても試験に合格できないとすれば、君にはあきらかに医者になる気持も使命もない、ということになるわけだからね」

すると多血質の学生はがっかりしたような顔になる。

「ですが、先生」と薄笑いをうかべて、「僕としては、少なくともずいぶん変てこなことになるんじゃないでしょうか。五年も勉強したあげく、急にやめてしまうなんて！」

「君はそういうけれど、かりに五年間を棒に振ったところで、そのあと一生きらいなことをやることを思えば、そのほうがまだましじゃないかね」

だがこう言ってしまうと私は急に彼がかわいそうになってくる。そこで急いでつけ加える。「それはそうと、どうすればいいかは君だってわかっているはずだ。つまりもう少しノートを読んで、それからまた来るといい」

「いつあがったらいいでしょうか？」とこの怠け者の学生は元気のない声でたずねる。

「いつでも好きなときに来たまえ。あしたでもかまわないよ」

すると彼の人のよさそうな眼の中に、内心考えていることがありありとうつる。つまりそれは『来ることは来てもいいが、おまえというちくしょうは、またおれをいじめやがるんだからな』ということである。

「もちろん」と私は言う、「これから私の試験を十五へんも受けたところで、べつにそのために君がかしこくなるわけのものでもないだろうが、とにかく君の人間をきたえるにはいい機会だからね。それだけでもありがたいと思わなくちゃ」

沈黙が訪れる。私は立ちあがって客の出て行くのを待っている。だが彼はつっ立ったまま、窓のほうを見たり、あごひげを引っぱったりしながら、何か思案している。私はそろそろあきてくる。

この多血質の男の声は、うるおいがあって、きいていて気持がいい。眼つきにもかしこそうな、皮肉なところがあり、顔だちもひとがよさそうだ。もっとも顔にいくらか小じわが見えるが、これはビールを飲みすぎるうえに、ソファに寝ころがっていることが多いせいだ。この男にオペラや、さまざまな恋の冒険や、好きな友だちの話でもさせたらさぞおもしろかろう。だ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com